1　学びの転換：学習から学問へ

小中高の児童･生徒は学習することを求められるが，大学の学生は学問することを要求されている。学習は先人が見出した知恵，獲得した技術や到達した思想などを知識として「習う」ことだが，学問ではこれらを基礎として，それまで自明とされてきたことを改めて「問う」ことにより，新しい発見や新しい見解を導き出す。優れた「問い」は「答え」への道筋のヒントを含んでいることもあれば，数学の難問のように数世紀にわたって後世の学徒(がくと)(学問する人々)を悩ませることもある。「問う」ことの重要性と難しさを認識して「如何(いか)に問うか」を考え続けること，即ち適切な「問い」を設定することは学問そのものである。高校から大学への「学びの転換」の本質はここにある。

1.1 なぜレポートが課せられるのか

大学の成績評価では，提出した課題レポートのみで評価されたり，レポート評価が試験成績に加えられたりすることがよくある。大学の授業でレポート課題が出される理由は，正解のない問題をあつかう場合が多いからであろう。高校までの学習では問題に正解があることがほとんどだが，大学での学問では正解がなかったり、正解がふたつ以上あったりすることが多い。新発見をめざす研究においては既成の正解がないことは当然だが，自明とされていることでも実は解釈が分かれていたり明確な位置付けがされていなかったりすることは非常に多い。正解のない問題について試験で正解を問うことは無意味なので，教員は学生にレポートを課して，学生がどのくらい授業内容を理解しているか，また自分なりの「問い」や「答え」を見出すことにどれだけの努力を払ったかについて評価している。

1.2 レポートを書くことは学問の鍛錬(たんれん)である

授業で課せられるレポートが発展すると，卒業論文や修士論文そして博士論文や学術論文へと段階が進む。学術論文とは特定のテーマやトピックについて研究成果や実験結果などが論理的に書かれた文章であって，何らかの著者のオリジナリティ(新しい発見や発想)が含まれている必要がある(この点が同じく学術的な文章である教科書や解説書と異なる)。

とはいえ，最初から学術的な論文は書けないし，初年次ゼミナールや授業での課題レポートでは高いオリジナリティまで求められてはいない。レポートを繰り返し書くことにより，自明のことを問い直すという学問における思考方法を修得し，その表現

方法を身に付けることができる。つまりレポートを書くことは学問する鍛錬であり，論文を書く練習といえる。学習から学問への学びの転換はレポートを書くことから始まる。

大学生になってこれまでの学習と違う何かをしてみたい，学問に近づきたいと考えるなら，アカデミック・ライティング実践の第一歩としてレポートを書くことにチャレンジしてほしい。